

手擲ち汝を王等の前に置て鞭物をからしむべし 汝正からざる交易をなして犯したる多の罪を以て汝の  
 聖所を汚したれば我汝の中より火を出して汝を廢き凡て汝を見る者の目の前にて汝を地に灰となさん  
 國々の中おて汝を知る者ハ皆汝を驚かさん汝ハ人の戒懼となり限りなく失果ん エホバの言我にのぞみて言  
 へ 人の子よ汝の面をソツツに向てこれに向て預言し 言べし主エホバはかく言たまふソツツよ 祿よ我  
 汝の敵となる我汝の中において樂羅を得ん我彼らを鞭き事をして彼らに顯さす時彼ら我の エホバな  
 るを知らん 我疫病を是におくろくの備に血をあらまめんろの四方より是に來るどころの劍に殺るる者  
 中に仆るべし彼らすなごち我の エホバなるを知らん イスラエルの家にはるの周圍にありて之を踐むる者  
 の所より重て惡き業棘苦き聖刺來ることおし彼ら我の主エホバなるを知らん 主エホバはかく言  
 へ 我イスラエルの家をろの散されたる國々より集めん時彼らに由りて我の聖き事を異國人の目の前にあ  
 らざさん彼らわらわが僕ヤコに興へたるろの地に住ん 彼ら彼處に安然に住み家を建てて葡萄園を作らん  
 彼らの周圍にありて彼らを觀察る者悉く我が鞭かん時彼ら安然に住み我エホバの巳の神なるを知らん  
**第十節** 十年の十月の十二日にエホバの言我にのぞみて言へ 人の子よ汝の面をエソツツの王  
 ソツツにむけ彼をエソツツ全國おむひかひて預言し 語りて言べし主エホバはかく言たまふエソツツの王ソ  
 ッツよ 視よ我汝の敵となる汝ろの河に臥すところの鱷よ 汝いよ河に我の所有なり我自己のためこれに遣れ  
 りと 我劍を汝の腮に鉤け汝の河の魚をして汝の鱧に附よ 汝および汝の鱧に附る諸の魚を汝の河より  
 曳いだし 汝汝の河の諸の魚を曠野に投ずてん 汝ハ野の面を仆れん 汝を取わぐる者なく集る者なかる  
 べし 我汝を地の塵と天の鳥の餌お興へん エソツツの人々皆我の エホバなるを知らん 彼等の イスラエルの

一 九章九節一節五〇十  
 二 九章九節一節五〇十  
 三 九章九節一節五〇十  
 四 九章九節一節五〇十  
 五 九章九節一節五〇十  
 六 九章九節一節五〇十  
 七 九章九節一節五〇十  
 八 九章九節一節五〇十  
 九 九章九節一節五〇十  
 十 九章九節一節五〇十  
 十一 九章九節一節五〇十  
 十二 九章九節一節五〇十  
 十三 九章九節一節五〇十  
 十四 九章九節一節五〇十  
 十五 九章九節一節五〇十  
 十六 九章九節一節五〇十  
 十七 九章九節一節五〇十  
 十八 九章九節一節五〇十  
 十九 九章九節一節五〇十  
 二十 九章九節一節五〇十  
 二十一 九章九節一節五〇十  
 二十二 九章九節一節五〇十  
 二十三 九章九節一節五〇十  
 二十四 九章九節一節五〇十  
 二十五 九章九節一節五〇十  
 二十六 九章九節一節五〇十  
 二十七 九章九節一節五〇十  
 二十八 九章九節一節五〇十  
 二十九 九章九節一節五〇十  
 三十 九章九節一節五〇十  
 三十一 九章九節一節五〇十  
 三十二 九章九節一節五〇十  
 三十三 九章九節一節五〇十  
 三十四 九章九節一節五〇十  
 三十五 九章九節一節五〇十  
 三十六 九章九節一節五〇十  
 三十七 九章九節一節五〇十  
 三十八 九章九節一節五〇十  
 三十九 九章九節一節五〇十  
 四十 九章九節一節五〇十  
 四十一 九章九節一節五〇十  
 四十二 九章九節一節五〇十  
 四十三 九章九節一節五〇十  
 四十四 九章九節一節五〇十  
 四十五 九章九節一節五〇十  
 四十六 九章九節一節五〇十  
 四十七 九章九節一節五〇十  
 四十八 九章九節一節五〇十  
 四十九 九章九節一節五〇十  
 五十 九章九節一節五〇十

家に居けるハ筆の木のてどくありき イスラエル汝の手を執り汝折てろの肩を盡く裂き又汝に倚り汝  
 てるの腰を盡く振まひ 早故に主エホバはかく言 祿よ 我劍を汝に持きたり 人ど畜を汝の中より絶ん  
 ソツツの地ハ荒て空曠するべし 彼らすなごち我の エホバなるを知らん 彼河に我の有かり我これを作れり  
 言へ 是故わ我汝の河を罰しエソツツの地をミグドルよりスエチオに至りエソツツの境に至るま  
 まで盡く荒て空曠くせん 人の足此を涉らざる 是此を涉らざる 四十の間に此人の住てどなかるべし  
 我エソツツの地を荒て荒たる國々の中におらめしめんろの邑々ハ荒て四十の間の間荒たる邑々の中おわ  
 べし 我エソツツの人を諸の民の中お散し諸の國に散さん 但し主エホバはかく言たまふ 四十の後我エソツ  
 ツ人をろの散されたる諸の民の中より集めん 即ちエソツツの俘囚人を歸しろの生れし國ある パテロス  
 の地おかへらまひべし 彼らハ其處お卑き國を成ん 是は諸の國よりも卑くして再び國々の上にいづて  
 どなかるべし 我かれを小くすれ 彼らハ重て國々を治むることおし 彼らハ再びイスラエルの家の特  
 道からしめイスラエルハこれに心をよせてろの罪をおもひ出さじむることおし 彼らすなごち我の主  
 エホバあるを知らん 汝に二十七年の一月の一日にエホバの言我にのぞみて言へ 人の子よ 彼ソツツの王  
 ソツツガナチサルろの軍勢をしてソツツにむかひて大に働かまひ 皆首禿げ皆眉徹る然に彼もろの軍勢もろの  
 爲るとこの事業のためソツツにソツツの報を得ず 是故に主エホバはかくいふ 視よ 我ハ彼ソツツの王ソツツ  
 ツガナルにエソツツの地を興へん 彼ろの衆多の財寶を取れ 物を掠め物を奪えん 是ろの軍勢の報たらん  
 彼の勞動る備として我エソツツの地をかれに興へ 彼わがために之をなしたれば 亦主エホバはこれを言へ  
 當日に我イスラエルの家にはるの一角を生せしめ 汝をして彼らの中に口を開くことを得せしめん 彼等すな

一 九章九節一節五〇十  
 二 九章九節一節五〇十  
 三 九章九節一節五〇十  
 四 九章九節一節五〇十  
 五 九章九節一節五〇十  
 六 九章九節一節五〇十  
 七 九章九節一節五〇十  
 八 九章九節一節五〇十  
 九 九章九節一節五〇十  
 十 九章九節一節五〇十  
 十一 九章九節一節五〇十  
 十二 九章九節一節五〇十  
 十三 九章九節一節五〇十  
 十四 九章九節一節五〇十  
 十五 九章九節一節五〇十  
 十六 九章九節一節五〇十  
 十七 九章九節一節五〇十  
 十八 九章九節一節五〇十  
 十九 九章九節一節五〇十  
 二十 九章九節一節五〇十  
 二十一 九章九節一節五〇十  
 二十二 九章九節一節五〇十  
 二十三 九章九節一節五〇十  
 二十四 九章九節一節五〇十  
 二十五 九章九節一節五〇十  
 二十六 九章九節一節五〇十  
 二十七 九章九節一節五〇十  
 二十八 九章九節一節五〇十  
 二十九 九章九節一節五〇十  
 三十 九章九節一節五〇十  
 三十一 九章九節一節五〇十  
 三十二 九章九節一節五〇十  
 三十三 九章九節一節五〇十  
 三十四 九章九節一節五〇十  
 三十五 九章九節一節五〇十  
 三十六 九章九節一節五〇十  
 三十七 九章九節一節五〇十  
 三十八 九章九節一節五〇十  
 三十九 九章九節一節五〇十  
 四十 九章九節一節五〇十  
 四十一 九章九節一節五〇十  
 四十二 九章九節一節五〇十  
 四十三 九章九節一節五〇十  
 四十四 九章九節一節五〇十  
 四十五 九章九節一節五〇十  
 四十六 九章九節一節五〇十  
 四十七 九章九節一節五〇十  
 四十八 九章九節一節五〇十  
 四十九 九章九節一節五〇十  
 五十 九章九節一節五〇十



之我エホバなるを知べし

ニホバの言我のよみて言ふ 人の子よ預言して言へ 主エホバかく言たまふ汝ら曰へ共其日

の日近しエホバの日近し是雲の日量與邦人の時なり 劍エホバト小曉さん殺るも者の

エホバト小作ると時エホバト小痛害あるべし敵の財寶を奪はんの基址ハ毀れるべし エホバト

人ヲ屠ル人凡て加勢の兵およびグア人あらび同盟の國の人々彼らとともお劍むたふれん エホバ

かく言ふエホバトを扶くる者ハ仆れ其驕るどころの勢力ハ失ふニグドルよりエホバにいたるまで人劍む

よりて已の中お仆るべし主エホバこれを言なり 其ハ荒て荒地の中あわり其邑々の荒たる邑の中にある

べし 我火をエホバトに降さん時又是を助くる者の皆ほろびん時ハ彼等我エホバなるを知ん 其の日

にハ使者船にて我より出てかば心強きエホバト人々を懼れんエホバトの日にありしごとく復等れ中

に痛苦あるべし視し是に至る 主エホバかく言たまふ我バビロンの王ヲチカチサルをもてエホバト

喧嘩を止むべし 彼よよび彼に去たふ人民即ち國民の中は暴き者を召來りてその國を滅さん彼ら劍をぬ

きてエホバトを攻めり殺せざる者各國に擲すべし 我らの河を瀆し國を惡き人の手ヲ賣り外國人の手

をもて國どうの中は物を荒すべし我エホバこれを言り 主エホバかく言たまふ我偶像を毀ち神々をノク

に絶さんエホバトは國より再び君たいづることなかるべし我エホバトは國に畏怖を養らざる我バ

ヲロスを荒しエホバト火を驟げし我觀を行ひ 我が怒をエホバトは要なるべしに洩ししは刑衆を絶べ

し 我火をエホバトお降さんエホバトの苦痛を聞えしハ打破らそつハ日申敵をうけん アベソトビセセラ

は少者の劍を仆れ其申は人々の擲ゆかれん 主エホバかく言たまふエホバトの軛を其處に摧く時に日暗

1 千三百六

2 千七百七

3 千七百九

4 千七百九

5 千七百九

6 千七百九

7 千七百九

8 千七百九

9 千七百九

10 千七百九

11 千七百九

12 千七百九

13 千七百九

14 千七百九

15 千七百九

16 千七百九

17 千七百九

18 千七百九

19 千七百九

20 千七百九

21 千七百九

22 千七百九

23 千七百九

24 千七百九

25 千七百九

26 千七百九

27 千七百九

28 千七百九

29 千七百九

30 千七百九

31 千七百九

32 千七百九

33 千七百九

34 千七百九

35 千七百九

36 千七百九

37 千七百九

38 千七百九

39 千七百九

40 千七百九

41 千七百九

42 千七百九

43 千七百九

44 千七百九

45 千七百九

以西結書終

るゼラルは一分ハイスサカルの境にうひて東は方より西は方にわたる ガの一分ハゼラルは境  
にうひて東は方より西は方にわたる 南の方ハその界ガの境界にうひてマルよりメリボラガゼラ  
ふよび河を沿て大海おいたる 是ハ汝らが鐵をもてイスラエルの支派の中におかちて産業とあすべき地  
あり 邑の門ハイスラエルの支派の名に去たが以北に三あり即ちルベンの門一エゾの門一レビの門一  
東の方も四千五百にして三の門あり即ちヨセフの門一ベニヤミンの門一ダンの門一 南の方も四千五百  
わして三の門ありすなぞハシメオンの門一 イッサカルの門一ゼラルの門一 西の方も四千五百にして  
ろの門三あり即ちガの門一アセルの門一 ナフタリの門一 四周ハ一萬八千あり邑の名ハ此日よりエホ  
バ此に在すと云ふ

1 千七百九  
2 千七百九  
3 千七百九  
4 千七百九  
5 千七百九  
6 千七百九  
7 千七百九  
8 千七百九  
9 千七百九  
10 千七百九  
11 千七百九  
12 千七百九  
13 千七百九  
14 千七百九  
15 千七百九  
16 千七百九  
17 千七百九  
18 千七百九  
19 千七百九  
20 千七百九  
21 千七百九  
22 千七百九  
23 千七百九  
24 千七百九  
25 千七百九  
26 千七百九  
27 千七百九  
28 千七百九  
29 千七百九  
30 千七百九  
31 千七百九  
32 千七百九  
33 千七百九  
34 千七百九  
35 千七百九  
36 千七百九  
37 千七百九  
38 千七百九  
39 千七百九  
40 千七百九  
41 千七百九  
42 千七百九  
43 千七百九  
44 千七百九  
45 千七百九



一至四〇一節

日 耶 七 〇 九 年

人 第 〇 十 二 〇 二 年

二 作 年 六 〇 七

ホ 代 年 〇 七 大 罪

一 和 四 〇 九 年

一 卷 〇 二

十 〇 十 〇 十 五 年

八 〇 九

十 〇 七

十 〇 三

十 六 〇 九 〇 一 節

十 六 〇 九 〇 二 節

但以理書

ニダの王エホヤキムは三年にバビロンの王ネブカデネザルに

を攻圍みしに主エホヤキムは神の器を己の家に携へてきて己の神の

をシナルに地に擲へて己の神の家に携へてきて己の神の庫に擲めたり

エホヤキムは王の血統に貴族たる者幾人を召寄しむ即ち身に疵な

く容貌美しくして一切の智慧の道に類く知識ありて思慮深く王の

宮に侍るに足る能幹ある少き者を召寄

てめこれにカルデア人の文學と言語を學んせんとす是をもて王の

命を下して日々に王の用うる饗

王の飲む酒を彼らに與へ去め三年の間かく彼らを養ひ育て去めんと

是の後に彼らをして王の前に

立ててを得せ去めんとなり是等の中にエホヤキムは王の

人長からに名をわたりてエホヤキムは王の用うる饗

をシナルに名をわたりてエホヤキムは王の用うる饗

己の身を汚すまじと心に思ひだためたる己の身を汚さざらん

はバダニエルをして寺人の長に養はせしめたるは王の用うる饗

ハ吾主なる王すてわ命をくだして汝らの食物と汝らの飲物を

見ん然る時ハ汝らのために我王に前办危からん

寺人の長ハメルガル官をしてバダニエルハナニヤミシヤエル及

アサリヤを監督せ置たればバダニエルに

言けるハ請ふ十日の間僕等を験したまへ即ち我らにハ菜蔬を與へ

て食せ水を與へて飲せよ而して我



らゝの面と王の饌を食ふ少者等の面とを較べ見汝の靨るどろ方に去たふひて僕等を待ひたまへと 是かお  
いて彼の事を聴ひれ十日のおひだ彼らを除くは十日の後おひたりて見るに王の饌を食入る諸の  
少者よりも彼らの面ハ美しくまた肥膩きてわりければ マルサル官すふは彼らの分なる饌と彼らの飲  
べき酒とを撤さざりて菜蔬をこれに與へたり この四人の少者ハ神知識を得させ諸れ文學と智慧に類  
からしめられたり 王ニエルハまた能く各種の異業と専求を曉る 王かねて命をくだし少者等を召いり  
送に經べき日と定めおきしがこの日數も過たるに因て寺人の長かれらをしてチゾカテサールの前にた  
りければ 王かれらと言駭り彼ら一切の中にハズニエルハチヨシヤニエルハチヨシヤニエルハチヨシヤニ  
ければこの四人ハ王の前に侍れり 王かれらに諸の事を論たぐね見亦彼らハ智慧の學に在りての全國  
の博士と法術士に愈ること十倍あり 王ニエルハクロム王元年までわろき

**第三章** 一

チゾカテサールの治世の二年にチゾカテサール夢を見ろれがために心に思ひなやみて復應る  
こと能はざりき 是をもて王ハ命を下し王のためあろの夢を解せんとして博士と法術士と魔術士とカル  
ズア人を召しめられたれば 彼ら來りて王の前に立つ 王すなごら彼らにむかひ我夢を見るの夢を義を知ら  
ふ心に思ひなやむと云ければ カルズア人等スリア語をもて王申しけるハ願くハ王長壽かれ諸ハ僕等に  
うの夢を語りたまへ我らうの解明を進めたるらんと 王てたへてカルズア人に言けるハ我すでお命  
を出せり汝等もしうの夢とこれの解明とを我お示さざるわかひてハ汝らの身ハ切裂れ汝らの家ハ屍にせ  
られん 又汝らもしうの夢とこれが解明とを我に示さば賜物と賞賚と大なる尊榮とを我より獲ん然れ  
ば我が解明を我に示せ 彼らまた對へて言けるハ願くハ王僕等らうの夢を語りたまへ然ハ我らうの解明を

リ 王三〇二 二 一〇一  
カ 七〇二 二  
三 四二 二 二 六五  
〇一 一 二 三 四 五  
五 六 七 八 九 一〇  
一一 一二 一三 一四 一五  
一六 一七 一八 一九 二〇  
二一 二二 二三 二四 二五  
二六 二七 二八 二九 三〇  
三一 三二 三三 三四 三五  
三六 三七 三八 三九 四〇  
四一 四二 四三 四四 四五  
四六 四七 四八 四九 五〇  
五一 五二 五三 五四 五五  
五六 五七 五八 五九 六〇  
六一 六二 六三 六四 六五  
六六 六七 六八 六九 七〇  
七一 七二 七三 七四 七五  
七六 七七 七八 七九 八〇  
八一 八二 八三 八四 八五  
八六 八七 八八 八九 九〇  
九一 九二 九三 九四 九五  
九六 九七 九八 九九 一〇〇

奏すべしと 王てたへて言けるハ我あきらかに知る汝らハ吾命の下りしを見るが故に時を延さんてを  
望むなり 汝らもしうの夢を我に示さば汝らを處置するの法ハ只一のみ汝らハ相語らひて虚言と妄誕  
なる詞を吾前かべて時を變るを待んとするなり 汝ら今先うの夢を我に加せ然れば汝らうの解明を  
も我に去めし得ること我を知らんと カルズア人等てたへて王の前申しけるハ世の中にハ王のうの事  
を示し得る人ハ箇もあはし是をもて王たる者主たる者君たる者等のの中に斯る事博士と法術士と  
カルズア人に問たぐねし者絶てからざるあり 王の問たまふの事ハ甚だ難し肉身なる者と共に居ざる  
神々を除きてハ王の前にこれを示すことを得る者無るべしと 斯りしかハ王怒を發し大に憤りハピロ  
ンの智者をことごとく殺せと命じたり 即ち此命くだりければ 智者等ハ殺さんてせり又ズニエルどろ  
の僕をも殺さんともどめたり 故に王の侍衛の長アリオクハピロンの智者等を殺さんて出きたりけれ  
バズニエル遠慮と智慧とをもて之を應答せり 王の高官アリオクに對へて言けるハ王なほとて  
斯すみやかにこの命を下したまひしやぞアリオクの事をズニエルも告えられた ズニエルひりて  
王おを求めて言ふ暫くの時日を賜へ然ハ王の解明を王に奏せんとして 斯てズニエルうの家にかへりうの同  
僚ハチニヤシヤニエルおよびアセリヤにこの事を告えらせ 其わこれ秘密にして天の神の憐憫を乞ひ  
ズニエルどろの同僚等を去てろの他のハピロンの智者どもに誠びささめたることを求めたりしハ  
ニエルつひに夜の異象の中にこれ秘密を示されければ 王ニエル天ハ神を稱讚ふ 即ちズニエル應へて言  
けるハ永遠より永遠かいたるまでハ神の御名ハ讚まつるべきなり 智慧と權能はてれが有なれば 亦  
彼の時と期とを變じ王を廢し王を立て 智者ハ智慧を與へ 賢者ハ知識を賜ふ 彼ハ深妙秘密の事を顯し

チ 五〇 六  
チ 五〇 七  
チ 五〇 八  
チ 五〇 九  
チ 五〇 一〇  
チ 五〇 一一  
チ 五〇 一二  
チ 五〇 一三  
チ 五〇 一四  
チ 五〇 一五  
チ 五〇 一六  
チ 五〇 一七  
チ 五〇 一八  
チ 五〇 一九  
チ 五〇 二〇  
チ 五〇 二一  
チ 五〇 二二  
チ 五〇 二三  
チ 五〇 二四  
チ 五〇 二五  
チ 五〇 二六  
チ 五〇 二七  
チ 五〇 二八  
チ 五〇 二九  
チ 五〇 三〇  
チ 五〇 三一  
チ 五〇 三二  
チ 五〇 三三  
チ 五〇 三四  
チ 五〇 三五  
チ 五〇 三六  
チ 五〇 三七  
チ 五〇 三八  
チ 五〇 三九  
チ 五〇 四〇  
チ 五〇 四一  
チ 五〇 四二  
チ 五〇 四三  
チ 五〇 四四  
チ 五〇 四五  
チ 五〇 四六  
チ 五〇 四七  
チ 五〇 四八  
チ 五〇 四九  
チ 五〇 五〇  
チ 五〇 五一  
チ 五〇 五二  
チ 五〇 五三  
チ 五〇 五四  
チ 五〇 五五  
チ 五〇 五六  
チ 五〇 五七  
チ 五〇 五八  
チ 五〇 五九  
チ 五〇 六〇  
チ 五〇 六一  
チ 五〇 六二  
チ 五〇 六三  
チ 五〇 六四  
チ 五〇 六五  
チ 五〇 六六  
チ 五〇 六七  
チ 五〇 六八  
チ 五〇 六九  
チ 五〇 七〇  
チ 五〇 七一  
チ 五〇 七二  
チ 五〇 七三  
チ 五〇 七四  
チ 五〇 七五  
チ 五〇 七六  
チ 五〇 七七  
チ 五〇 七八  
チ 五〇 七九  
チ 五〇 八〇  
チ 五〇 八一  
チ 五〇 八二  
チ 五〇 八三  
チ 五〇 八四  
チ 五〇 八五  
チ 五〇 八六  
チ 五〇 八七  
チ 五〇 八八  
チ 五〇 八九  
チ 五〇 九〇  
チ 五〇 九一  
チ 五〇 九二  
チ 五〇 九三  
チ 五〇 九四  
チ 五〇 九五  
チ 五〇 九六  
チ 五〇 九七  
チ 五〇 九八  
チ 五〇 九九  
チ 五〇 一〇〇



今わらちが汝を求めたるどころの事を我におまめしたまへば我感謝すて汝を稱讚す即ち汝の王の事の  
 を我らお示したまへり是に於いて「ガニエル王」が「バビロン」の智者等を殺すことを命じおける「アリオク  
 の前にいたり即ちいりてこれお言ける「バビロン」の智者等を殺す勿れ我を王の前に引いたれよ我らの解  
 明を王に奏上せよ」と「アリオク」は「ガニエル」を引急ぎ王の前かいたり王おまめしける「我ニガの  
 俘囚人の中に一箇の人を得たり是者らの解明を王にまうしおけん王にこれ入て「ルサヤ」を名くる  
 「ガニエル」お言ける「汝が我が見たる夢をどうして解明を我に知することを得んや」と「ガニエル」は  
 へて王の前に言ける「王の問たそふ秘密の智者、法術士、博士、卜師、魔術師など之を王に奏上ることを得ず  
 然と天に一の神ありて秘密をわらしたまふ彼後の日に起らんとこの事の如何なるかを「ゾラマデ」が  
 「王」にまらせたそふなり汝れ夢が牀にありて想見たまひし汝の腦中の異象は是なり「王」汝牀わいり  
 「席」を來の事の如何を想ひまされたまひし秘密を顯す者將來の事の如何を汝にまめしたまへり「我の  
 この元現を夢れる凡の生る者にまざりて我お智慧あるに由にあらす唯この解明を王お知まむる事あり  
 て王のつひにこの心に想ひたまひし事を知にいたりたまえんがためなり「王」汝の一箇れ直ある像の汝  
 の前に立るを見たまへり其像は大きくてその光輝は常ならずの形に畏つておわり 其像は頭は純金、  
 胸と兩腕は銀腹と腰は銅、腰は鐵脚は一分は鐵一分は泥土なり 汝見て居たまひしに遂に一箇  
 の石の手によらずて懸れて出でこの像の鐵と泥土との脚を撃てこれを碎けり「斯りしかば」の鐵と泥  
 土と鐵と銀と金とハ皆どもに碎けて夏の禾穂の糠のごとくお成り風お吹えらされて止まるところ無り  
 而してこの像を擧たる石は大なる山となりて空地に充り是らの夢あり我らこの解明を王の前に陳  
 列す「王」汝と諸王の王おいませり即ち天の神汝に國と權威と能力と尊貴とを賜へりまた人の子等野の獸畜  
 かよび天空の鳥ハ何處に在る者にもわれ皆これ汝の手に與へて汝にこれをことごとく治めまめたまふ  
 汝ハすなわち此金れ頭なり 汝の後に汝お劣る一の國おこらんまた第三の銅の國おてりて全世界を治め  
 る第四の國ハ堅きこと鐵れごとくおからん鐵ハ能く萬の物を擧ち碎くなり鐵の是等をことごとく打碎く  
 がごとく其國ハ毀ちおちつ碎くことをせん 汝の足の趾を見たまひしに一分は陶人の泥土一分は鐵  
 ちりければその國ハ分裂たる者ならん又汝鐵と泥土との混相たるを見たまひたればその國ハ鐵れごとく  
 強からん 足の趾の一分は鐵一分は泥土なりとごとくその國ハ強きところもわり脆きところも有ん  
 るごとく彼と相合すること有し 此の王等の日お天の神一の國を建たまえん是ハ何時までも滅ぶる  
 こと無らん此國ハ他は民お歸せず却てこの諸の國を打破りてこれを滅せん是ハ立て永遠にいたりん  
 の石の手によらず承して山より懸れて出で鐵と銅と泥土と銀と金とを打碎きしを汝が見たまひしに即ち  
 この事なり大御神の後の起らんとこの事を王おまめせられたまへり是の夢ハ眞にしてこの解明ハ確  
 なり是に於いて「ゾラマデ」が「王」ハ俯伏して「ガニエル」を拜し禮物と香をこれに獻ることを命じたり 而  
 して王にたへて「ガニエル」に言ける「汝がこの秘密を明かお示すことを得たるを見れば汝らの神ハ神々  
 等の神王等の主にして能く秘密を示す者ありと かくて「王」ハ「ガニエル」に高位を授け種々の大なる賜物を  
 與へてこれを「バビロン」の總督となしたまふ「バビロン」の智者等を縛る者の首長とさせり 王は「ガニエル」

千三百八十二

子 四〇五 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

而してこの者を知らたまふた明光彼の裏にあり しが先祖等の神よ汝ハ我お智慧と權威を賜ひ  
 今わらちが汝を求めたるどころの事を我におまめしたまへば我感謝すて汝を稱讚す即ち汝の王の事の  
 を我らお示したまへり是に於いて「ガニエル王」が「バビロン」の智者等を殺すことを命じおける「アリオク  
 の前にいたり即ちいりてこれお言ける「バビロン」の智者等を殺す勿れ我を王の前に引いたれよ我らの解  
 明を王に奏上せよ」と「アリオク」は「ガニエル」を引急ぎ王の前かいたり王おまめしける「我ニガの  
 俘囚人の中に一箇の人を得たり是者らの解明を王にまうしおけん王にこれ入て「ルサヤ」を名くる  
 「ガニエル」お言ける「汝が我が見たる夢をどうして解明を我に知することを得んや」と「ガニエル」は  
 へて王の前に言ける「王の問たそふ秘密の智者、法術士、博士、卜師、魔術師など之を王に奏上ることを得ず  
 然と天に一の神ありて秘密をわらしたまふ彼後の日に起らんとこの事の如何なるかを「ゾラマデ」が  
 「王」にまらせたそふなり汝れ夢が牀にありて想見たまひし汝の腦中の異象は是なり「王」汝牀わいり  
 「席」を來の事の如何を想ひまされたまひし秘密を顯す者將來の事の如何を汝にまめしたまへり「我の  
 この元現を夢れる凡の生る者にまざりて我お智慧あるに由にあらす唯この解明を王お知まむる事あり  
 て王のつひにこの心に想ひたまひし事を知にいたりたまえんがためなり「王」汝の一箇れ直ある像の汝  
 の前に立るを見たまへり其像は大きくてその光輝は常ならずの形に畏つておわり 其像は頭は純金、  
 胸と兩腕は銀腹と腰は銅、腰は鐵脚は一分は鐵一分は泥土なり 汝見て居たまひしに遂に一箇  
 の石の手によらずて懸れて出でこの像の鐵と泥土との脚を撃てこれを碎けり「斯りしかば」の鐵と泥  
 土と鐵と銀と金とハ皆どもに碎けて夏の禾穂の糠のごとくお成り風お吹えらされて止まるところ無り  
 而してこの像を擧たる石は大なる山となりて空地に充り是らの夢あり我らこの解明を王の前に陳  
 列す「王」汝と諸王の王おいませり即ち天の神汝に國と權威と能力と尊貴とを賜へりまた人の子等野の獸畜  
 かよび天空の鳥ハ何處に在る者にもわれ皆これ汝の手に與へて汝にこれをことごとく治めまめたまふ  
 汝ハすなわち此金れ頭なり 汝の後に汝お劣る一の國おこらんまた第三の銅の國おてりて全世界を治め  
 る第四の國ハ堅きこと鐵れごとくおからん鐵ハ能く萬の物を擧ち碎くなり鐵の是等をことごとく打碎く  
 がごとく其國ハ毀ちおちつ碎くことをせん 汝の足の趾を見たまひしに一分は陶人の泥土一分は鐵  
 ちりければその國ハ分裂たる者ならん又汝鐵と泥土との混相たるを見たまひたればその國ハ鐵れごとく  
 強からん 足の趾の一分は鐵一分は泥土なりとごとくその國ハ強きところもわり脆きところも有ん  
 るごとく彼と相合すること有し 此の王等の日お天の神一の國を建たまえん是ハ何時までも滅ぶる  
 こと無らん此國ハ他は民お歸せず却てこの諸の國を打破りてこれを滅せん是ハ立て永遠にいたりん  
 の石の手によらず承して山より懸れて出で鐵と銅と泥土と銀と金とを打碎きしを汝が見たまひしに即ち  
 この事なり大御神の後の起らんとこの事を王おまめせられたまへり是の夢ハ眞にしてこの解明ハ確  
 なり是に於いて「ゾラマデ」が「王」ハ俯伏して「ガニエル」を拜し禮物と香をこれに獻ることを命じたり 而  
 して王にたへて「ガニエル」に言ける「汝がこの秘密を明かお示すことを得たるを見れば汝らの神ハ神々  
 等の神王等の主にして能く秘密を示す者ありと かくて「王」ハ「ガニエル」に高位を授け種々の大なる賜物を  
 與へてこれを「バビロン」の總督となしたまふ「バビロン」の智者等を縛る者の首長とさせり 王は「ガニエル」

千三百八十三

子 四〇五 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇



